夢の中の風景

串田孫一

彌生書房刊

夢の中の風景

串田孫一

di, meliora nics

彌生書房刊

© 1975　　検印省略

夢の中の風景

1975年10月15日　初版印刷

1975年10月25日　初版発行

著　者　串田孫一

発行者　津曲篤子

発行所　株式会社 彌生書房

東京都新宿区中町18　電話・東京(260) 3707(代表)

印刷・(株)浩文社　製本・大口製本印刷(株)

〈落丁・乱丁本はお取りかえいたします〉

0095—75150—8525

目

次

丘に吹込んだ風　七
冬の朝の光　一〇
荒れた谷の梅　一三
花と水の語らい　一六
落花の頃　一九
螻蛄の鳴く坂　二三
田舎道　二七
泉　三〇
椋鳥の鳴いた夜　三三
冬の午後　三七
*
物好きな隠棲　四一
春の近い公園　四五
幼女と犬　四九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

夢の残骸　三三
田舎の子供たち　三七
赤い靴　六一
＊
林下風　六五
坂　六九
春を呼ぶ人たち　七三
苦笑　七七
呟き　八一
蠟燭の夜　八四
逃げる　八六
血の流れ込んだ死顔　八〇
黄昏　八四
九八

月見　一〇四
夢の中の風景　一〇八
＊
街に戯れる自然　一一三
川岸　一一七
公園　一二三
港町　一二七
海峡　一三三
峠路　一三六
北の丘への憧れ　一五一
岩のある草原　一六一
後記　一九一

裝幀　著者

夢の中の風景

丘に吹込んだ風

銀に光る川の蛇行を見下ろす丘の中腹まで来て、乾燥し切った枯草に腰を下ろした。そんなにせかせかと登って来たわけではないのに、幾らか息が弾んで顔も火照っていた。歩きながら、少し気がかりになっていることをずっと考えていたので、ここまで来て、今年もまた、なかば草に蔽われた小径を、こうして歩いて行くような一日一日が続くのかと思った。公的な職を退いてもういい加減になるが、更に外に出て人と会って取り決めをするような仕事も出来る限り遠慮をするように努めて来た。だが、それが賢明であったかどうかは私にも分ってはいない。

努力をした以上、自分で望んでいたことも否めないが、今となっては何だか自然にそうなったような気持の方が強い。あれは確か二十四、五の頃だったが、仲よくしていた少し年上の友だちが、突然私に両手の十本の指を見せろと言い出し、ゆっくり一本一本を見てから、分ったと言った。何が分ったのかと訊ねると、私の死ぬまでの運命がはっきり分ったという。晩年になるに従

って、足跡もない小径に迷い込んで行くが、自分は迷っているとは思わない。そういうことを言われた。それなら君はどうなのかと問い返すと、三年後に死ぬよと笑っていた。

そんな冗談ごとのようないい加減な占いなんぞ忘れていたが、頑丈な体の彼がちょうどそれから三年後に急病で死んでから、彼に言われたことが時々想い出されるようになった。

それとは別に、ここ何年か元日に年賀に来る人もなく、私も新年の挨拶に行くところもなく、結局家にいれば、普段と変りなく部屋に入って仕事をすることになる。それで今日は西へ向って小一時間ばかり電車に乗り、午後の、日暮までの時間を、丘を歩きにやって来た。

上空には風があるらしく、僅かにちらばる雲が晒飴のように幾分だらしなくのびては千切れ、次には薄綿のようになって消える。風は飽きずに、遠くの山から流されて来た雲を同じように弄んでいるが、その雲がそろそろ薄赤く色づく頃には、多分この地上の、空の上からも目立っている筈の川をめがけて吹き下りて来るだろう。今は穏やかに光っている川は、その時はさざなみ立ち、川原の隅の方には小さいつむじ風が起るかも知れない。

私はそれまでに川の岸辺へ辿り着いていたいと思って立ち上った。その時、丘の重なり合う方から、灰色を想わせるような風の音が聞こえ出し、二分もたたないうちに、急ぐ足許から枯葉を舞い上らせる風の先端が吹き込んで来た。私は上衣の襟を立て、その中で頸を縮めながら、何や

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

らおかしさが込み上げて来るのを覚えた。

それは木の葉のように自分が飛ばされるとしたら、随分滑稽な姿だろうと、一瞬想像したからだろうか。それとも平凡に書き続けている日記に、せめて元日のアクセントとしてこの風のことが書けると思ったからだろうか。

冬の朝の光

このところ三、四日おきに吹く季節風の、がくがくするような冷たい荒れ方で、窓外の眺めは冬の頂点に達したという感じである。そんな風にも散り残った山吹の葉が、数えてみれば十数枚、朝毎の光の中で、柔かく、弱々しく慄えている。だが今朝は特別にその色がきれいである。

一枚一枚の葉を改めてよく見れば、殆どへりが褐色に枯れていて、満足な姿のものはない。緑色の部分も勿論ない。見方によれば、疾うに落ちるべきものが、未練がましく、枝先にしがみついているようでもあるが、この冬の朝の、日毎に新しい日の光を待ち受けて、短時間ながらそれと融け合う悦びを忘れずにいる。

日光を受けてそれを照り返す椿や山茶花の葉をごく近くに見ながら、それを一向に羨むこともなく、山吹の葉はなよなよとした自分の性格を心得て光との交わりに、老いて穏やかに安らぐ、その日その日をひっそりと生きているように見える。

その容子を見るには、普段より幾らか早目に床を離れて、私の仕事部屋の雨戸を開けなければならない。日の出の時刻は既に心持ち早くなっているが、春の来る前にはまだ寒さが幾重にも層になっている。そんなことを想いながら、光をたっぷりと吸った薄黄色の葉を見ていると、黄金などという形容が俗っぽく、それよりは遙かに明るい生命の知恵というものを教えているように思える。

太陽は緩やかな空の坂をのぼり、冬枯れの欅の枝越しに、東の窓から斜めに私の仕事机の上にやって来る。そして最初に見付けたのはインク壜である。うっかり落としてもまず割れることもない厚みのある硝子をとおり抜けて、光はブルーのインクに射し込む。私はかじかむ手先を揉みながらそれを見るが、こんなにもきれいな液体をペン先につけて、毎日の仕事をしていたのかと、単純で素朴な悦びに浸るのだった。

光の線は刻々と角度を変える。私は筆立てに使っている壺から、長い柄のついた拡大鏡を抜き出す。これは、古い辞書の、細かい文字を読まなければならない時に使っているが、今はこの机を訪れた朝の光の相手をして貰おうというのである。多分、何かの記念に贈られたこの拡大鏡は、専ら細かい文字を見る助けになって貰っているだけで、光と戯れたことはないだろう。

すると光は、前の晩から書きはじめた原稿紙の上で、強い一点になろうとしたり、冬の旅を楽

しんでいる親しい友だちが旅先から寄こした葉書の上に突然鮮やかな七つの色を並べたりする。七つの色は虹のように弓なりになり、拡大鏡の角度を変えると再び無色の環に戻る。

巨大な太陽から遠く離れ、しかもそれをこうして程々に弄ぶ位置に生存し続けている私は、今冬の光の中で、全くいわれのない手先の戯れに酔いかけている。その私にとって光とは何であるのかも殆ど知らずに……。

硝子窓を開け放つ。流れ込む空気は寒いが、それだけ光に近付いた気分になる。そして今は多少感覚をその方に集中はしているが、それは長く続く筈もない。数分もたたないうちに、光と熱との源や、その微妙に釣り合っているこの状態を忘れてしまうだろう。

実際、私はもうその時には、落葉松の天辺に少し前からとまって、じっと遠くを見つめている一羽の鵯(ひよ)を見ているのだった。落葉松も今はただ細かい枝ばかりで、生命を証明するようなものは何も見せていない。

私は鵯に、あの甲高い声を知らず識らず期待していたのだが、急に何かを思いついたように飛び立って行った。もう私の手許から去った光を、この鳥は、軽ろやかに波状に切って行った。

荒れた谷の梅

これまで幾度か歩いたことのある丘陵地帯であるが、そのあたりの地図を大ざっぱでいいから描いてみて呉れと言われても、私には描けない。何ヶ処かの地形や、ある地点からの眺めは可なり克明に記憶しているが、それがこの丘のどの辺で、またどの方角を向いた時のものかが分らないので、幾らよく憶えていても地図を描いてみる時の役には立たない。

ある夏の終り頃であった。夕映えと、そこを流れる雲の幾つもの群に見惚れているうちに日が暮れ、近道をするつもりで、その丘のはじめての谷へと下った。最初のうちは覚束ないながらも小径があって、草を膝のあたりで分けるようにして下ったが、いつの間にかその道が消えていた。多分見失っていたのだろうが、それは大して気にもならず、浅い谷の草地を下って行った。

その谷が大きく曲っているところに、はっきりは数えられなかったが、二十本余りの梅の木がかたまっていた。夕闇が既に濃く、灯も持たない私にはよく見えなかったが、何れも幹の容子は

古木で、異様な感じであった。暫く立ちどまって、それを眺めるというよりも、どうしてこんな場所に梅の木がかたまっているのかを考えていたが、これという程のことも想い浮ばず、少々気味も悪くなって、幸に昇った満月に近い月のあかりで里へと下って来た。

その翌年の寒さの盛りに、どうもその梅の古木が気になって、あの木々が花を咲かせている容子を想像しているうちに、もう一度、昼間明るい時にはっきりと確かめて置きたくなって出掛けた。前に下って来た里の方から逆に辿って行ったが、途中三軒ばかり、ひっそりと残っている農家の一つの、日だまりの縁先におばあさんが置物のように坐っているので、その梅の木のことを訊ねた。

予想していた以上に耳が遠くて、とんちんかんな返事に苦労したが、戦争の時に、梅干をつくるために植えられたものだということと、最近は手が足りないので放ってあるが、あそこに梅があるのを知っているものが、実のなる頃に行って採り、多分儲けているだろうということが分った。近頃ではその梅の実が随分いい値段になっているのを、この年寄が知っているのかどうなのか、それは分らなかった。

よく晴れていた日ではあったが、朝の冷え込みがそのままいつまでも消えずにいて、手袋もとらずに煙草をのんだりした程だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c